

---

# 全力疾走チルドレン

改札口

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

全力疾走チルドレン

### 【Nコード】

N2492E

### 【作者名】

改札口

### 【あらすじ】

最近のお母さんはおかしい。まったく二階から降りてこないんだ。そんな時、弟の一哉が大変なことに。一哉を救えるのは僕しかないない！少し悲しくて、少し幸せな物語。ムチャ企画参加作品です。他の作者さんの小説はムチャで検索したら見れます

## 第一部 全力疾走チルドレン

薄いレースが波打って、優しく僕の頬をなでた。

うつらうつらと船をこいでいた僕は、本当に水しぶきが散ったかのようにびっくりして飛び起きた。

時計を見ると、二と三の間で長い針と短い針が止まっている。

目をこすって立ち上がる。ちょっとふらふらしたけど、それもすぐに治った。

そんなとき、奥の部屋から爆音……いや、弟のかすや一哉の泣き声が聞こえてきた。

一哉がなく度に思うんだけど、赤ちゃんの泣く声はすごい。なんだからものすごく生きてるって感じがするんだ。根拠なんかないのだけれど。

「お母さん！」

僕は一哉に負けないくらいの大きな声を出して、二階にいるはずのお母さん呼んだ。

でも、返事は返ってこない。

仕方なく、僕は一哉が泣き叫んでいるベビーベッドに近づいた。

「ほら泣くんじゃないの。男の子だよ」

そう言い聞かせても、一哉はまったく泣きやまない。

どう見たってお手上げって感じた。

でも僕には必殺技があるんだ。

両手で自分の頬を思いつき引っ張って、舌を出す。今日はおまけに変な声も出してみた。

ものすごく痛いけど、一哉が泣きやむならやってやる。

なにしろ、お母さんでも手間取ってしまう一哉の「かんしゃく」に一番効果があるのは、この顔なんだから。

ほら、いつのまにか笑ってる。

それにしてもお母さんには困ったものだ。  
ずっと二階にこもったままで、一哉のミルクも僕が作ってあげて  
いる。

明るくて、いつも笑っていたお母さんの顔も忘れちゃうくらい、  
長い間会ってない気がする。

一哉は一哉で、「かんしゃく」がひどくなってる気がするんだ。  
ほんとに、一哉の声で家が揺れちゃうくらい。

心配ばかりで外にも出られない。

僕はため息を吐いて、タンスの上に飾ってある写真を見た。  
三人分の笑顔の上に、うっすらとほこりが層を重ねていた。

そんなある日だった。

お気に入りの本を読んでいた僕は、一哉の激しい泣き声に、文字  
から目を離してゆっくりと立ち上がった。

大きな恐竜の親子が、もっと大きな木の下で久しぶりに出会う。  
といったお気に入りの場面だったから、正直イライラしていた。

でもそれよりも大きな不安と嫌な予感が、僕を立ち上がらせてい  
たんだ。

「どうしたんだ。一哉」

今までにないくらい泣き叫ぶ一哉に、戸惑いがちな僕の声は口か  
ら出てすぐのところまで、かき消されてしまった。

「一哉ってば」

恐る恐る触った一哉の頬が熱い。柔らかい一哉の頬を燃やしてし  
まうような熱さに、僕は思わず手を引っ込めた。

その間も一哉は、顔を、体を真っ赤に染めながら何かを強烈に訴  
えている。

そうなって初めて、僕にもこの重大さがわかってきた。

やっぱり僕はのんびり屋さんのお母さんの子どもだったみたいだ。生まれて初めて、そのことをほんの少しだけ後悔した。

「お母さん一哉が大変だ。お母さん!!」

のどが張り裂けそうになるくらい大きな声を出すけど、お母さんは降りてこない。

階段の下まで駆けつけるけど、それより上には行けない。

行ってはいけないんだ。そう約束したから。

「お母さん。おかあさんってば」

なぜか涙が溢れてきて、声も震えちゃって、大きな声なんか出せない。鼻水も出てきて、舌がうまくまわらない。

力が抜けて、そのまま膝から崩れながら僕は真っ暗な闇の中に放り込まれた気分になった。

どこか抜けてるお母さんと、いなくなったお父さん。まだ赤ちゃんなの一哉。

すっかりしなくちゃ。僕がちゃんとしなくちゃ。

そう思ってた、できてると思ってた。

でも違ったんだ。

最後ちゃんとできたとしても、その途中や途中の途中なんかはお母さんに助けてもらってた。

なのにいつも一人でやったって。やりきったって胸はってたんだ。結局。なに一つ、一人じゃできていなかったのに。

「ごめんね一哉」

耳を塞いで、うづくまった。

それでも一哉の助けを求める声は、何度も何度も耳の中で響き渡る。

「今の僕には何にもできないんだ。僕にはなんにも……」

ミルクを与えることはできても、泣き止ませることはできても、

他のことは何一つできない。  
やらなくてもわかっている。  
誰も、僕を見ようとはしないから。

とんつと誰かが背中を押した。

「お母さん？」

目に涙をいっぱい浮かべながら振り返ったけど、ぼんやりとした影はお母さんのものではない。

「行かないと。みんな待ってるよ」

「無理だよ」

「無理じゃないよ。君はみんなの未来を変えられる」

優しく言ったその声に、僕は涙を拭く。

「ほんとに？」

その影は、ゆっくりと頷いた。

それに反応して、僕は立ち上がる。何か、言葉にできない力が僕の体に満ちている。そんな気がした。

そうだ。僕しかないじゃないか。

歯を食いしばって、歩き出す。

「頑張って」

背中の方から投げかけられた声に、もう一度背中を押され、僕は玄関の方こうの光の中に飛び込んでいった。

靴を履いた僕は、まっすぐに僕が生まれた病院を目指す。  
場所は覚えていた。

つい最近まで、ずっとそこに通っていたから。

そのお医者さん。わたなべ先生っていう優しい女の先生がくれるアメが、この世で一番おいしいアメだったのを僕は知っていたから、病院はそんなに嫌いじゃなかった。

そんなとき、ふつと何かが胸の奥につつかえて立ち止まって空を見上げた。

大きな雲も向こう側が見えた気がして、微笑んだ。

そうか。あの人は……。

ゆっくりだった足を思い切り前へ踏み出した。

風を切る。そんな感触に包まれた。

走っちゃいけないと言われ続けきた僕にとって、今初めての体験だった。

アスファルトの上を走る。いつもの何倍も速く過ぎ去っていく電信柱。土手を駆け上がる感触を確かめる暇もなく、僕はただ走っていた。

横を走る大きな川は、陽の光を反射してきらきらと輝いている。

目の端っこに移る遠い街の煙突は、何本も現れては消えていく。

肺が燃えるようだった。心臓が破裂するくらい、動いている。

それでも僕は自分に言い聞かせた。

走れ、走れ、もっともっともっと。何もできない僕を吹き飛ばす

くらい速く。

でも、大きな橋を渡る頃には、心臓が口から飛び出るくらいにめちゃくちゃに動いてて、さすがに歩幅が狭くなってしまった。

そしてついに歩きだしてしまった。

橋の真ん中で、座り込んで息を整える。

しんどいのに。息をするのもつらいのに、妙に自慢したいような

そんな気持ちで、僕を包んでいた。

前を走る自動車を眺めいたとき、あるものが目に入った。

花束だった。

赤い橋に負けないくらい華やかな花たちが、ガードレールにくくりつけてある。

ああ。そうか。僕は呟く。そして大きく深呼吸した。

その瞬間、なにかが風に乗って僕の髪に絡まった。

それを見たとき、思わず笑みがこぼれる。

神様がいるとしたら、きっと粋な神様に違いない。こんなものをプレゼントしてくれるのだから。

ゆっくりと立ち上がる。

そしてそのまま走り出した。地面をしっかりと踏みしめて。前を向いて、息を大きく吐いて。

あの花束の場所に、僕がいて笑顔で手を振っていた。その笑顔の向こうに、道は続いている。

僕は、僕に笑みを返す。

「そうだね。まだまだ行けるよね」

僕の言葉に、僕は大きく頷いてそして消えた。

さあ行こう。この道は誰かの未来につながっている。

僕はもう止まらない。

大切なものが、僕の小さな手で守れることを知ったから。

全力疾走チルドレン 結

## 第二部 時速4きろめーとる

この季節、机の前にある窓から入り込んでくる風は、少し涼しくなる。

清潔感をだすように短く切りそろえた髪が、耳元で静かに踊るのを私は黙って鑑賞していた。

観衆は私と、絵本を切り取った動物と、子どもたちが描いた絵。舞台は私の頭。

静かに、ひたすら静かに踊り続ける髪の毛たち。

何かの予感が、私を机の前に縛り付けていた。嫌な予感ではない。

もつと言葉にしにくい感情。そんなものが私の胸の中で自己主張していた。

「渡辺先生？」

振り返ると、そこには長年ここに勤めているベテラン看護士の佐伯さんが立っていた。

「なにをしてるんですか。ぼおつとしちゃって」

「いえ、なんでもありません。少しだけ考え事を」

ごまかそうと作り笑いを浮かべるが、そんなもの人生経験が豊富な佐伯さんにはお見通しなのだろう。その証拠に、佐伯さんは困ったように口を開いた。

「あのね、初めての経験だから仕方がないだろうと思うけどいつまでも気にしてたら、きりがないわよ」

「ええ、わかっています。わかっていますけど」

「あなたの患者さんはまだまだいるの」

言葉を濁らした私に向けて、佐伯さんはそう言い放つ。

「わかってます。あの子は私の数多くの患者さんの一人なんだって。

でも……」

せめて最期だけは。と言いかけた口を閉じ、代わりに息を吸い込んだ。

振り返って笑顔を作る。今度はうまく作れたようだ。

「大丈夫です。今夜でふつきらせますから」

佐伯さんはまだどこか不満そうだが、仕方なさそうに頷くと、さようなら。と言って部屋を出て行った。

その背中がドアに隠れると、ため息をついた。

「ふつきる、ね」

瞳を閉じるとあの子の姿が目には浮かぶ。

生まれつき心臓に病を抱えていた。

決して走ってはいけない子だった。

それでもみんなに追いつこうと必死になって前を向いている男の子だった。

「必要以上に感情移入してはいけない」

呟きながら目を開くと、男の子の残像はむなしいくらい簡単に消えていく。

まるで最初から存在しなかったかのように。

ふわりと何かが宙を舞い、肩の上を通り越した。季節外れの何か  
が、窓から入り込んできた。

窓から視線を外し、無意識のうちにそれを追いかける。

桃色のそれはひらひらと、掃除されたばかりのひんやりとした床  
に沈んでいった。

「先生知ってる？ 僕って時速四キロメートル以上走っちゃいけないんだよ」

一年前の春の日のあの子がイスをくるくる回しながら笑っていた。

「あら、もう時速なんて言葉知ってるの」

「当たり前だよ。僕もう大人なんだから」

言った男の子は、頬を膨らませる。彼には悪いが、少しも怒っていないようには見えない。

「洗濯機も、掃除機もかけられるんだから」

「あら。最後に仕上げるのはお母さんなだけだな」

「お母さんは黙ってて！ ちゃんと出来てるんだよ。ほんとうだからね」

面白そうにくすくす笑う彼の母親は、少しとぼけているが、とても優しいような母親だった。

どうしようもない新米小児科医の私が彼の担当になった時点で、きっと彼女はわかったのだろう。

あの子が決して心臓に負担をかけるようなことをしないように、こつした話の中で無理な運動をしないように諭すことしか、予防法がないことにも。

だから私も覚悟を決めていた。

でも彼の死は本当に、突然で、反則のような、そんな最期だった。

瞳の中で火花が散って、我に返る。

「もう、馬鹿みたい」

幻覚まで見て本当に情けない。この職業は本当に向いてないのかもしれない。そう思い、頭を上げたときだった。

壁にかかった一枚の絵が目に入った。

たどたどしい曲線のキリンやゾウ。ウサギにシマウマが、思い思いにのさばっているコルクボードの中の一匹の動物に、何か違和感を感じたのだ。

その動物は、時速百キロで草原を駆け回る動物、チーター。

やけに黒の斑点が多いそれは、あの男の子が描いたものだった。でもひとつだけ、黒ではない何かがあるところにあった。

「これは……」  
ちょうど胸のところをひっかかっているそれは、ついさっき見たものだった。

指でそれをつかみ、周りを見渡す。

白いレースが静かにたなびいている光景も、窓から見える薄い雲もいつもとかわらない。

でもわかった。

この部屋の空気が変わった。自信なんかないけど、理由を聞かれなくても困るけど、確かにそんな気がしたのだ。

慎重に息を吸い込む。

何も聞こえない。何も見えない。

ただ、部屋の扉が静かに開いていった。

その向こうに、あの花びらが吸い込まれるように消えていく。

私の足は、無意識にその花びらを追いかけていた。

ひらりひらりと、まるで子どもがはしゃいで花びらを好き勝手に振り回しているかのように、つかみどころのない動きをしている花びらは、それでもまっすぐに病院の出口に向かっている。

「先生？」

「ちよつと出かけてきます」

不審そうに話しかけてきた声の主は、おそらく佐伯さんだろう。

顔は見えていない。視線は宙を舞う花びらに釘付けだったから。

そう言っつて、自動ドアの向こうへと消えていった花びらを駆け足で追いかけた。

外に出ると一瞬見失ったが、電信柱の横を通り過ぎていくのをなんとなく見つけた。

急いで、手短にある自転車に乗り込んだ。名前を見ると、佐伯と書いてある。

「すみません佐伯さん。ちょっとだけ貸してください」  
小さく呟くと、視線を前に向ける。  
見つけた。

時速四キロメートルで遠ざかっていく、小さな小さな花びらを。  
息を吸うと一気にペダルをこいだ。小さく軋んだ音がした。

時速四キロメートルとる 結

### 第三部 雲の向こうへ

いつからだろう。私の世界がこの七畳半の和室になってしまったのは。

なんでだろう。カーテンの隙間から差し込んでいるはずの一筋の光さえ、私の瞳が捉えられなくなってしまったのは。

息を吐く。

深く深く、もっと深く。そうすれば、隆宏に近づける。そんな気がしたから。

誇りの積もったこの部屋にこもり始めてから、一体何日たったのか私にはわからなかった。

何も出来ない。動けない。

この世界と、私と、きつと隆宏もあの日から時間は止まってしまっているに違いない。そう思うと、自然に唇の右端が持ち上がった。このままずっとこうしていて、そのうち息の仕方も忘れてしまつて、死んでしまえばいい。

すべてが時を止めたこの世界で、膝を抱えたまま朽ち果ててしまえばいい。

ねえ、隆宏。

あなたはこんな私をどこで、どんな顔をして見ているの。

何も無い空間に、隆宏の笑顔を思い浮かべて、つられて笑ったふりをした。

こうすればこの世界に私と隆宏の二人きりになれるから。隆宏をずっと閉じ込めておけるから。

こうして今日も私は、静かに埃を身に積もらせていく。

静かだった世界に、ひどく人工的なチャイムが鳴り響いた。驚いて思わず飛び上がる。腰が痛かったが、黙ったままじっと聞き耳をたてた。

「内海さん。いませんか!？」

どこかで聞いたことがある声が、したの階から聞こえてくる。若い声だが、緊張しているのか微かに震えている。

しばらくの間音は聞こえなかったが、不意にドアを閉める音がして、同時に何者かが入ってくる音がした。ひどく慌てているようだ。

からっぽだった私の感情の器に、どす黒い何かがたまってくる感じに、低くうなった。

床の間の花瓶を手に取った。

その拍子に枯れた花が畳に落ちて、その一部を粉に変えた。

襖を開けて、外に出る。そこには下へと続く階段がひっそりとたたずんでいる。

花瓶が割れるくらい、強く握りしめ、階段を降りる。

「これは……… いったいどうなってるの」

動揺しきった声が、私が一番下の段を降りると同時に聞こえてきた。

息を殺して、そっと部屋をのぞきこむ。

白衣を着た女性が、立ったまま何かを見下ろしていた。

そこに何かがあるかなんて、知らない。知りたくもない。この世界には、私と隆宏しかいなかったはずなのに。

だから、私と隆宏の世界を壊した目の前の女が憎かった。どんなものよりも壊したかった。

背後からそっと近づく。

花瓶をぎゅっと握り締めて、大きく振りかぶる。

女性は、何かに気を取られたままでこちらに気付いていない。

そして一瞬。花瓶の割れる音が、世界を覆い尽くした。

「……内海さん」

花瓶は、私の手を滑り落ちた先にある床で、その身を砕いていた。その音に振り返った。女性を私は知っている。

そして、振り下ろそうとした瞬間に見えた女性の向こうにいる、小さな小さな人間も私は知っていた。

「渡辺、先生」

「内海さん大変です。一哉君が」

一哉。その単語に、世界が大きく揺れ始める。

私はたまらず目をつむった。

それでも、暗闇の中にいた隆宏はもう、どこにもいなかった。

そしてゆっくりと目を開いた。その瞬間、世界は動き始めた。

「一哉！！」

渡辺先生を押しつけて、ベビーベッドを覗き込んだ。

一年も会ったことのなかったようなその体は、赤く染まっていた。

おそるおそる、触れてみる。

小さな命が燃えているように熱かった。

「先生どうしよう。私のせいで、私のせいで一哉が！！」

「落ち着いて。とにかく救急車を」

手先が震える私に代わって、先生が電話を押していたのを覚えている。でも、そこから先は記憶がはつきりしていない。

ただずつと誰かに謝ってたのは覚えている。

それが一哉に対してなのか、隆宏に対してなのか、わかるはずもなかった。

病室には、新しい朝が訪れていた。

「おはようございます」

そう言っただけで現れたのは、渡辺先生だった。私服を着ていてなかなか似合っている。でも、その顔に浮かべた申し訳なさそうな顔は、少し場違いだ。

「何で先生がそんな顔をするんですか。その顔をしなければならぬのは私です。本当にご迷惑をかけました」

「気にしないで下さい。私ももっと早く気付けばよかったです」  
そう言っただけで、少し先生は声を落とした。

「それよりも大丈夫ですか？」

「先生驚いてましたよ。数日放置していた割には体力は低下していません。誰かがミルクを上げていたんじゃないかって疑うくらいです」

言葉を切っただけで、息を吸った。

先生は、その言葉を聞くとなぜか表情を崩した。それに気付かないふりをして、言葉を続ける。

「私の方も一時的な精神のショックだろうから、正しく治療すれば大丈夫。だからもう心配しないで下さい。といってもあまり説得力がないでしょうけど」

そうですか、よかったです。ほっとしたような先生の表情は、本当に私達のことを思ってくれていたとを物語っていて、ますます申し訳なくなる。

だから自然と言葉が出てきたのだろう。

シートをつかんで、歯を食いしばった。

「本当に私は、一哉の親としても、隆宏の親としても失格です」

窓から降り注ぐ陽射しに、シートの真っ白い海原はきらきらと輝いていた。

「隆宏がいつか死んでしまうのは覚悟できていたんです。しっかりと受け止めて生きていこうと思っていました。でも、あの子があの橋の上で、交通事故で逝ってしまった時、わからなくなりました」

やわらかい風が私の頬を優しくなでる。

「私が覚悟していた隆宏の死に方と、交通事故で死んでしまった隆宏。どっち現実で、どっちが虚像か。どっちが隆宏にとって幸福だったのか。そう考えてたら、気付いちやっただんです」

自嘲して、唇の右端を持ち上げようとしたり。でも、震えてしまつてうまくできない。

「私、あの子が死ぬことしか考えていなかったんだなって。隆宏が笑つてるときも、泣いてるときも、寝てるときも。そして、死んでしまつてからも」

そしたら、悲しくなった。

だからあの子についての死なんて考えるのをやめよう。隆宏の生を肯定しよう。

一片のかけらもなく、隆宏の死を排除しよう。

「そう考えたたん、何も聞こえなくなつてしまつたんです。勝手ですよ、きつと隆宏もこんな情けない母親に愛想つかして、とつくに天国にいつてますよ」

必死に、こみ上げてくる涙をごまかそうと、笑みを浮かべようとする。

そう。こんなどうしようもない母親なんか見捨てて、早く生まれ変わつて幸せな家庭で、丈夫な体をもらつて生きて欲しい。

それが今、私が願わなければならないことだ。

母親として、最低限の義務じゃないか。

だから笑う。変な顔になつたつて、絶対に泣いちゃいけないんだ。

「きつとまだ、隆宏君はここにいると思いますよ」

「え？」

ぼつりと言つた先生は、顔に優しい笑みを浮かべている。

そしてそつと、私の手の下に広がる真っ白い海原に、一つの船を浮かべた。

それはあまりにも時期はずれな、さくらの花びらだった。

おまちごつさま！

ベッドの端っこで足をぶらぶらさせながら、こちらに笑いかけた隆宏が、瞬きする間だけ、見えた気がした。

「約束。守ってただ」

花びらをすくい上げ、両手で包み込む。

一緒に寝たいとせがむ隆宏に、私は少し意地悪をした。もう咲いているはずのない、さくらの花びらを持ってきたら、上の階で一緒に寝てもいいよ。

そう言っ指きりげんまんしたのだ。

両手を胸に押し付けた。私の心臓の鼓動がした。しっかりと動いている。

「いいよ。いつでもおいで」

情けない私だけど、ちゃんと生きていくから。

「ずっと待つてるから。いつでも来ていいから。だから、だからね

……」

いつまで泣いてるの。しかたないなあ。

生意気に、腕を組んで呟く隆宏は、顔を伏せていた。

分かってる。

あんたを想って泣くのはこれが最後。だから今だけは、お願い。

息を吸って、吐いた。涙はまだ流れてるけど、しっかりと前を向いた。

花びらが、手のひらの中で微かに動く。

そつと開くと、ふわりと宙に浮いた。私は、口を開いた。

「いつてらっしゃい」

手のひらに乗っていた花びらは、今は部屋をゆっくりと一周していたが、意を決したように窓を飛び越えて、大きな空へ駆け出していた。

ずっとずっと、雲の向こうまで駆け出していた。

雲の向こうへ 結

## 第四部 しあわせの温度

外の世界はどうなっているのだろうか。

待っているのは幸せだろうか。辛いことは何回で、嬉しいことは何回待っているのだろうか。

わたしが生まれたとき、天気は晴れかな。曇りかな。それとも、雨が降っているのかな。

寒いのだろうか。暑いのだろうか。

何年後かに、あなたがわたしに教えて欲しい。あなたが生まれた日は、こんな日だったのよって。

そしたらわたし、やっぱりねって言って笑うんだ。

そんな気がしてたんだよって言って、胸を張るから。

あなたの歌う歌、また聞けるね。

外から聞こえるあなたの声は、この中だったら何度も何度も響いて、心臓の音くらい大きく響いて、すごくすごく気持ちいい。

でもやっぱり、あなたの声が空気を震わしてわたしの耳に届いたらしいなって思う。

ねえ。あなたは気付いてくれるかな。

きつと大丈夫だね。

外に出た瞬間、わたしは記憶とか、そんなものは全部忘れてしまっただけ、ちゃんと私の手のひらに花びらをくっつけて生まれてくるから。

あなたはよろこんでくれるかな。

わかんないね。わたしにも、あなたにも。

これからの未来も、なにも分からないまま生まれて、生きていかないといけないから。

でも、これだけは言っよ。  
言葉にならなくなったって、言っよ。

「ただいま」って。

それまでの間、もうちょっとここであなたの歌、聞かせてね。

しあわせの温度 結

第四部 しあわせの温度（後書き）

こういう作品とは、また少し距離をおいて次は違う雰囲気作品に挑戦してみたいと思います

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2492e/>

---

全力疾走チルドレン

2009年3月24日09時45分発行